

さが
まり 松 遺跡

2018年3月

天竜丸澤株式会社
長野県飯田市教育委員会

序

私たちの住む飯田市は、中央アルプスと南アルプスに挟まれた伊那谷の南部に位置し、古くから交通の要所として栄えてきました。また、海拔400mの天竜川河畔から、海拔2000mの中央アルプス、海拔3000mの南アルプスまでの変化に富んだ地形と豊かな自然に恵まれています。そうした自然を生かし、小京都といわれる飯田城下町を中心に、まちの暮らし、里の暮らし、山の暮らしが営まれ、古代から伝わる伝統文化が息づいています。

近年、継続的に実施されている埋蔵文化財包蔵地の発掘調査によって、当地方の原始・古代史が次第に明らかになってきています。こうした結果、当地方における先人たちの活動は、古く3万年以上も前の旧石器時代にさかのぼることがわかつてきました。それ以降、当地方に暮らした人々の足跡を追ってみると、その生活域は現在の私たちが暮らす箇所と重なってくることが多いことも分かってきました。そこからは、人間の営みの継続性を知ることができます。その一方で、埋蔵文化財を後世に残すことや、活用することの難しさも強く感じています。

埋蔵文化財は文字どおり地下に埋もれているため、なかなか身近に感じることが少ないと思います。しかし、埋蔵文化財は私たちの祖先の歩んできた足跡を示しており、当地方の歴史を雄弁に語ることができるものです。

このような文化財は、一度壊してしまうと二度とは元に戻らないため、できる限り現状で保存することが最善といえます。しかし、現代に生きる私たちの暮らしに欠かせない開発事業との間では、発掘調査を実施して記録に残して保存することで後世に伝えることもやむを得ないものです。

今回発掘調査を実施した下り松遺跡は、縄文時代の集落跡として知られる遺跡です。今回の発掘調査では、縄文時代の住居跡が確認されました。調査結果は本文で述べられているとおりです。今後、本書が広く活用されるとともに、地域の皆様に歴史や文化財がより身近に感じられるようになれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査に際し多大なるご理解とご協力をいただきました事業者様をはじめ、本調査・報告書刊行に関係された皆様に、深く感謝申し上げます。

平成30年3月

飯田市教育委員会

教育長 代田昭久

例　　言

- 1 本報告書は、工場建設に先立ち実施された飯田市竹佐433-1他所在の埋蔵文化財包蔵地下り松遺跡の緊急発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は天竜丸澤株式会社からの委託を受けて、飯田市教育委員会が実施した。
- 3 調査は平成28年度に発掘調査を実施し、平成29年度に整理作業及び報告書刊行を行った。
- 4 発掘調査及び整理作業には略号SGM433-1を用いた。
- 5 遺構には文化庁文化財部記念物課監修 2010 『発掘調査のてびき－集落遺跡発掘編一』に基づき以下の略号を用いた。
溝：SD 竪穴建物：SI 土坑・貯蔵穴：SK 炉・カマド：SL
- 6 調査区は、世界測地系による飯田市新埋蔵文化財基準メッシュ図（以下、「基準メッシュ」とする。）に基づき設定した。基準メッシュの設置については、飯田市教育委員会 2009 『切石遺跡群』に記載されている。
- 7 調査位置は基準メッシュのⅧ LC-93 18-34、Ⅷ LC-93 18-42に位置する。
- 8 土層観察については、小山正忠・竹原秀雄 2015 『新版 標準土色帖』の表示に基づいて記録した。
- 9 基準点測量は株式会社小林コンサルタントに委託した。
- 10 本書は木下正史が執筆し、馬場保之が総括した。
- 11 本書に関する出土品及び諸記録は飯田市教育委員会が管理し、飯田市考古資料館で保管している。

目 次

本 文 目 次

序	⑥ 006SK	10
例言	⑦ 008SK	10
目次	⑧ 009SK	10
第1章 経過.....	⑨ 010SK	10
第1節 調査に至る経過.....	⑩ 011SK	10
第2節 調査の経過.....	⑪ 017SK	10
(1) 現地調査	⑫ 018SK	10
(2) 整理作業・報告書刊行	⑬ 019SK	10
第3節 調査組織.....	(3) 遺構外	11
(1) 調査	第2節 調査区2	11
(2) 事務局	(1) 溝	11
(3) 指導・協力	① 012SD	11
第2章 遺跡の環境.....	② 013SD	11
第1節 自然環境.....	(2) 土坑・貯蔵穴	11
第2節 歴史環境.....	① 015SK	11
第3章 調査の概要.....	② 016SK	11
第1節 調査区の設定.....	(3) 炉・カマド	11
第2節 基本層序.....	① 014SL	11
(1) 調査区1	第3節 予備調査(試掘調査)	12
(2) 調査区2	(1) トレンチ1	12
第4章 遺構と遺物.....	(2) トレンチ2	12
第1節 調査区1	(3) トレンチ3	12
(1) 壓穴建物	(4) トレンチ4	12
① 007SI	(5) トレンチ5	12
(2) 土坑・貯蔵穴	第5章 まとめ.....	13
① 001SK	第1節 これまでの調査.....	13
② 002SK	第2節 繩文時代.....	13
③ 003SK	引用・参考文献.....	13
④ 004SK	報告書抄録.....	21
⑤ 005SK		

挿 図 目 次

挿図 1	遺跡の位置図	5
挿図 2	調査位置及び周辺遺跡地図	6
挿図 3	基本層序	7
挿図 4	遺構全体図	8
挿図 5	竪穴建物 (007SI)	14
	土坑・貯蔵穴 (001SK)	
	・002SK・003SK・004SK	
	・005SK・006SK・008SK	
	・009SK・010SK・011SK	
	・015SK)	
挿図 6	土坑・貯蔵穴 (016SK)	15
	・017SK・018SK・019SK)	
	溝 (012SD・013SD)	
	炉・カマド (014SL)	
挿図 7	出土遺物	16

写真図版目次

図版 1	調査区 1・2 調査前全景	17
図版 2	調査区 1・2 全景	18
図版 3	竪穴建物 (007SI)	19
	土坑・貯蔵穴 (001SK)	
	・002SK・003SK・004SK	
	・005SK・006SK・008SK	
	・009SK・010SK)	
図版 4	土坑・貯蔵穴 (011SK)	20
	・015SK・016SK・017SK	
	・018SK・019SK)	
	溝 (012SD・013SD)	
	炉・カマド (014SL・014SL断面)	

第1章 経過

第1節 調査に至る経過

天竜丸澤株式会社が計画する工場建設工事に係る埋蔵文化財包蔵地下り松遺跡の保護については、平成27年7月25日に、遺物包含層や遺構確認面までの深さ、遺構の広がり、埋蔵文化財の時代及び種類等を把握する目的で、予備調査（試掘調査）を行い、縄文時代と考えられる遺構・遺物を確認した。

平成27年度の予備調査の結果をもとに、平成28年度に発掘調査の範囲等詳細について事業主との協議を行い、平成29年2月に発掘調査を実施することとなった。

また、文化財保護法第93条の届出が、平成29年2月3日付で提出され、それを受け長野県教育委員会と飯田市教育委員会で保護協議を行い、工事着手前に記録保存のための発掘調査を行うこととなった。

発掘調査に係る委受託契約及び協定について、天竜丸澤株式会社と飯田市教育委員会で、平成29年2月1日に締結し、現地での作業を平成29年2月4日から開始し、平成29年2月18日に終了した。

整理作業は、平成29年4月11日に天竜丸澤株式会社と飯田市教育委員会の間で、整理作業及び報告書刊行業務に係る委受託契約を締結して、飯田市考古資料館にて実施した。

第2節 調査の経過

（1）現地調査

現地作業は、平成29年2月4日に重機による表土掘削作業を行い、平成29年2月6日から作業員による調査を開始した。また、同日に委託業者による測量作業を行い、調査区に基準点を設置した。順次、遺構の検出及び精査、図面作成、写真撮影を行った。遺構実測や遺物採集に係る調査区の設定は、飯田市新埋蔵文化財基準メッシュに基づき行った。平成29年2月18日に重機による調査区の埋戻し作業を行い、現地における作業をすべて終了した。

（2）整理作業・報告書刊行

整理作業は飯田市考古資料館で実施した。遺構等は実測図を基に第二原図を作成し、清書を行った。出土遺物の洗浄・注記・復元・実測等を行った。これらのうち、特徴的なものについて実測・拓本作業・清書を行った。遺構について写真図版を作成した。その後、本原稿を執筆して本報告書刊行となっただ。

第3節 調査組織

(1) 調査

調査主体者	飯田市教育委員会 教育長 代田 昭久				
調査担当者	木下 正史				
調査員	下平 博行	瀧谷恵美子	坂井 勇雄	羽生 俊郎	佐々木佑里香
	山下 誠一				
作業員	伊藤 和忠	伊東 裕子	金澤勢津子	小林 重夫	中野満里子
	中野 充夫	蓑島 正三	木下由紀子	関島真由美	竹本 常子
	中田 恵	中平けい子	福澤 育子	松本 恭子	宮内真理子
	森藤美知子	森山 律子	吉川 悅子		

(2) 事務局

飯田市教育委員会

平成28年度

教育次長	三浦 伸一
文化財担当参事	松下 徹
生涯学習・スポーツ課文化財担当課長兼文化財活用係長	馬場 保之
生涯学習・スポーツ課文化財保護係長	下平 博行
生涯学習・スポーツ課文化財保護係	木下 正史 羽生 俊郎 宮澤 圭 佐々木佑里香 山下 誠一 村沢ひとみ
生涯学習・スポーツ課文化財活用係	櫻井 正富 瀧谷恵美子 坂井 勇雄 山岸 正明

平成29年度

教育次長	三浦 伸一
生涯学習・スポーツ課文化財担当課長	馬場 保之
生涯学習・スポーツ課課長補佐	関島 隆夫
生涯学習・スポーツ課文化財保護係長	下平 博行
生涯学習・スポーツ課文化財活用係長	伊藤 尚志
生涯学習・スポーツ課文化財保護係	木下 正史 羽生 俊郎 宮澤 圭 佐々木佑里香 福井 優希 山下 誠一
生涯学習・スポーツ課文化財活用係	櫻井 正富 坂井 勇雄 瀧谷恵美子

(3) 指導・協力

長野県教育委員会事務局

第2章 遺跡の環境

第1節 自然環境

飯田市は長野県の南部を並走する木曽山脈（中央アルプス）と、赤石山脈（南アルプス）及びその前山である伊那山脈に挟まれた、伊那谷と呼ばれる伊那盆地の南端に位置する。谷底には天竜川が諏訪湖から流れて太平洋へ注いでいる。伊那谷の形成は、約250万年前に天竜川が流れ始めたころから始まる。主に赤石・木曽の両山脈が隆起すると、天竜川に流入する河川によって扇状地が形成され、さらに山地と沖積地の間には逆断層が形成された。この逆断層こそ日本一といわれる伊那谷の段丘を発達させた一つの要因である。この段丘を、地質学では堆積物を基準に、高位面、高位段丘・古期扇状地、中位段丘・中期扇状地、低位段丘Ⅰ・新期扇状地、低位段丘Ⅱの5つに大きく編年している。一般的には、飯田市周辺では比高差約70mの念通寺断層を境に上下を分けて区分し、高燥した台地を上段（うわだん）、湿潤した沖積地を下段（しただん）と俗称している。こうした段丘を天竜川の支流が開析して田切地形を形成しており、伊那谷特有の景観を形成するとともに、行政面や文化面でも境界となっている。交通からみると、北は国道153号（伊那街道）により上伊那郡、南は天竜川と国道152号（秋葉街道）・国道151号（遠州街道）・国道153号（三州街道）によって静岡県西部・愛知県東部、西は中央高速自動車道西宮線・国道256号（清内路街道）によって木曽谷および岐阜県東部にそれぞれ通じている。まさに飯田市は長野県の南の玄関口といえる場所である。

山本地区は、飯田市の西部に位置し、西側を木曽山脈前山、東側を二ツ山・城山・水晶山に囲まれ、小盆地を形成している。山本地区では、木曽山脈前山から南流し、阿智川に流れ出す湯川や箱川、二ツ山と城山の間を抜けて天竜川に注ぐ久米川によって形成された扇状地が発達しているが、北側にある大明神原を除いて規模は大きくない。これらの扇状地は当初一続きの平坦な扇状地であったが、その後の小河川の浸食作用により、開析・分断され、東西に細長い台地を形成している。下り松遺跡が立地している台地は、山本地区の南東部にあり、北西から南東に延びている。

第2節 歴史環境

飯田市内では、山本地区の竹佐中原遺跡・石子原遺跡出土の旧石器が後期旧石器時代の初頭前後のもので、日本列島最古級の人類痕跡である。しかしこれらを除くと、伊那谷では旧石器時代の遺跡は極めて稀である。

縄文時代に入ると、河川に面した低位段丘上に草創期の遺物が散在し、その後早期や前期は西側の山麓周辺に遺跡が偏る。中期に入ると爆発的に集落が増加し、段丘面に大規模集落が造られた。しかし、後期から晩期にかけては遺跡数が極端に減少し、段丘崖下の湿地付近や河川に面した低位段丘上などに、遺跡の立地が変化する。山本地区では石子原遺跡で早期押型文土器の集落が確認されており、これが最も古い時代のものとなる。それに続き、白山遺跡、箱川原遺跡、湯川遺跡、山本西平遺跡等から中期の竪穴建物跡が確認されている。白山遺跡の調査では、中期中葉の集落跡を確認した。特筆すべきものとして、2号竪穴建物跡から装飾把手付深鉢が出土している。箱川原遺跡は中期後葉の集落跡であ

り、顔面付の釣手土器、有孔鍔付土器等が確認されている。また、長野県埋蔵文化財センターによる下り松遺跡の調査では、中期後葉の竪穴建物が調査されている。中期に続く後・晩期の遺構は明らかではなく、他地域と同様な様相を示す。

弥生時代は、前期・中期までは主に下段の低湿地に面した位置に安定的な集落が営まれる。後期には、上段へも集落が広がるが、上段の遺跡は小規模で短期間で終息する傾向が強い。この傾向は古墳時代の前半まで続く。山本地区内では沖平南遺跡で後期の竪穴建物が確認されている。

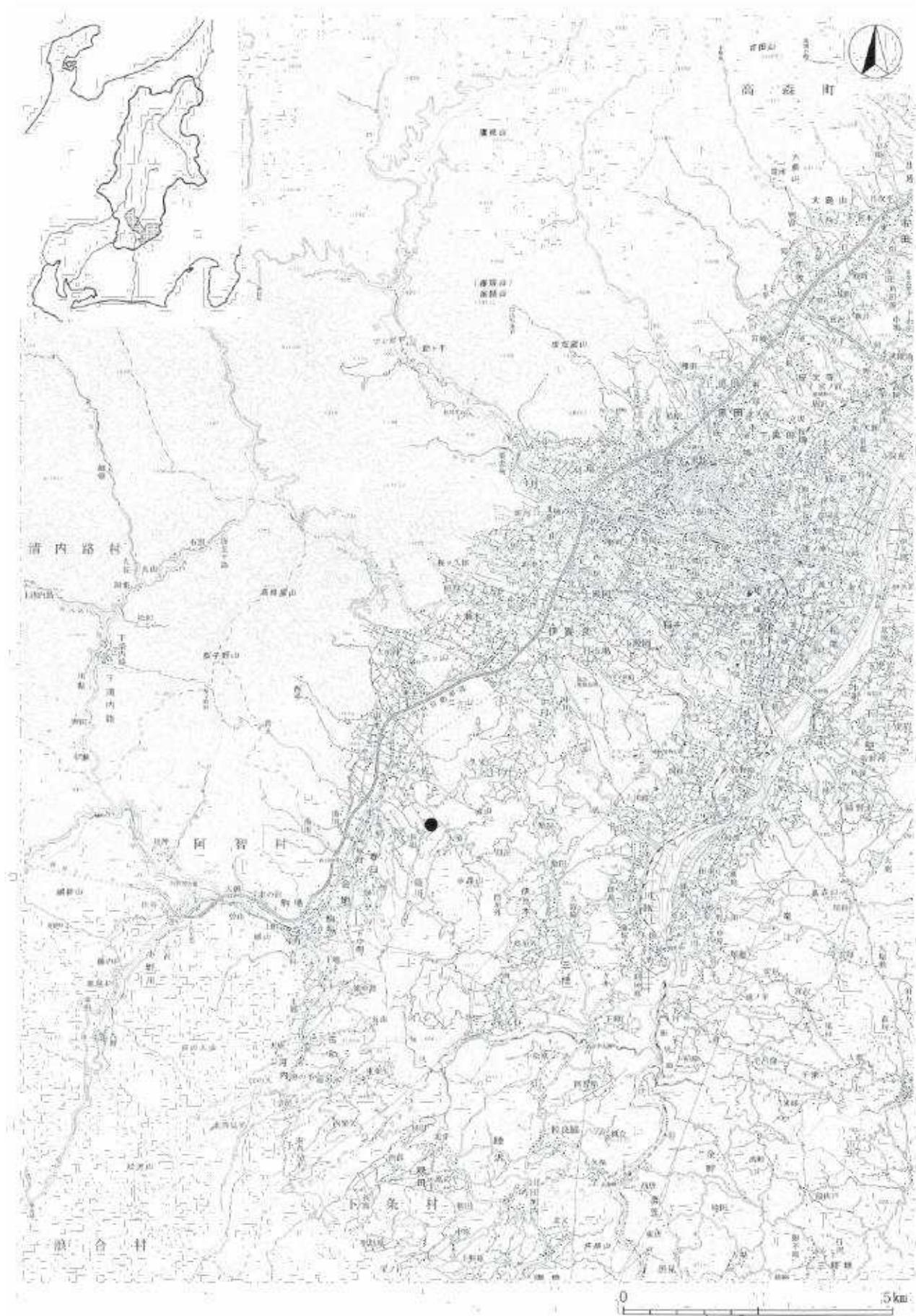
古墳時代中期後半から後期にかけて、市内の座光寺・上郷・松尾・竜丘・川路地区を中心に多数の古墳が築造される。特徴として馬と馬具の出土が多いことがあげられる。当時ヤマト政権が海上から陸上へと交通政策を転換したために地理的に飯田の重要度が増し、馬を管理するヤマト政権と関係の深い集団が飯田に現れたと推定されており、彼らの首長墓である前方後円墳11基と帆立貝形古墳2基が、飯田古墳群として史跡に指定されている。山本地区では、13基の古墳が確認されているが、円墳のみで現存するものは少なく、ほとんどが消滅している。石子原古墳では、墳丘から4基の埋葬施設が確認され、出土遺物から6世紀初頭に位置づくものとされている。高野遺跡では、竪穴建物が1軒確認されており、古墳時代中期に位置づくものとされている。

律令制が導入されると当市は東山道信濃国伊那郡に編入され、座光寺地区に郡衙が設置された。同地区的恒川遺跡群では、7世紀後半から10世紀頃の正倉などが確認されており、恒川官衙遺跡として史跡に指定されている。奈良時代の山本地区では、伊賀良中村地籍にまたがる久米地区の高野遺跡から、その終末に位置づく竪穴建物、掘立柱建物、製鉄工房が調査されている。これらは遺跡近くにある名刹光明寺との関連が考えられている。他には当該期の遺構は調査されておらず不明な部分が多いが、隣接する阿智村からの経路を考慮すれば、古代東山道が通過していた可能性も考えられ、集落等の存在も予想される。

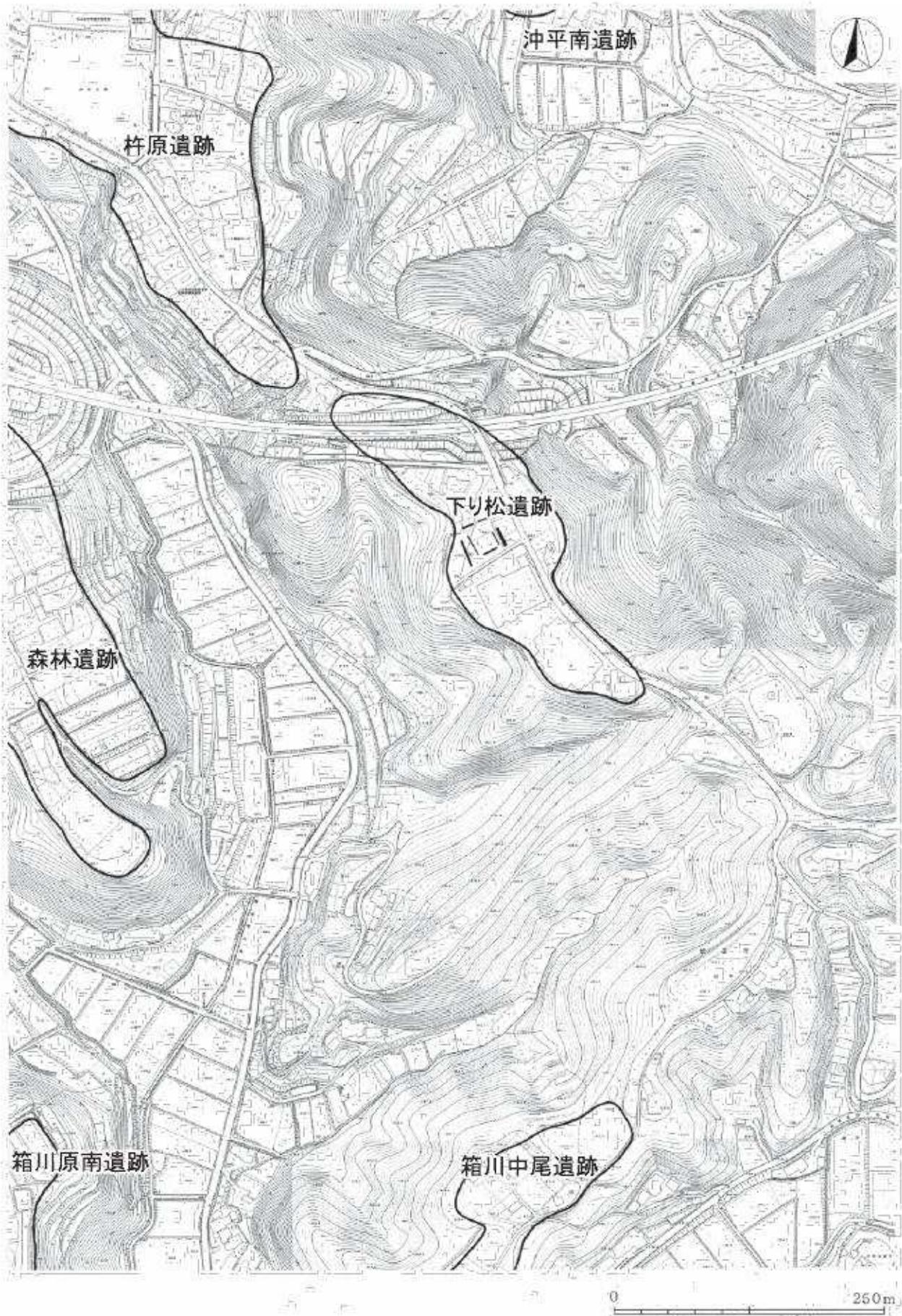
平安時代については、前述した光明寺の薬師如来座像はその胎内に保延六年(1140)の銘を持っており、地区的平安時代の様相を具体的に示している。また、長野県埋蔵文化財センターによる竹佐中原遺跡の調査では、当該期の竪穴建物が1軒確認されているが、奈良時代同様他には遺構が確認されていない。

中世の山本地域は、伊賀良庄に属していた。地頭は北条時政であり、地頭職はその後も一族である江馬北条家へ受け継がれていった。鎌倉幕府滅亡後は松尾小笠原家一族の支配下におかれ、城山に有事の際の山城として久米ヶ城が築かれ、山本東平の麦種城、西平の城山を支城としていた。山本大塚遺跡では当該期の火葬墓群が確認されている。沖平南遺跡では、当該期の掘立柱建物跡が確認されている。

近世になると、山本地区は幕府旗本の近藤家や、尾張藩の支藩である美濃高須藩の領地となり、それぞれ陣屋を構えていた。現在、近藤家、高須藩の陣屋跡は石垣のみが残り、当時の名残をとどめている。



挿図1 遺跡の位置図



挿図2 調査位置及び周辺遺跡地図

第3章 調査の概要

第1節 調査区の設定

今次調査地点は飯田市竹佐433-1他で、発掘調査位置は、世界測地系を用いた飯田市新埋蔵文化財マッシュ図による区画、VIII LC-93 18-34、VIII LC-93 18-42に位置する。

工場建設予定地のうち、建設により影響を受けると考えられる範囲を対象に、調査区1・調査区2の2箇所に調査区を設定した。なお、調査区1と調査区2では、1.34m程度の標高差があり、調査地点は南東側から北西側にかけて、緩やかに傾斜している。

調査面積は合計で98.93m²である。なお、調査区1の調査面積は49.77m²、調査区2の調査面積は49.16m²である。

第2節 基本層序

(1) 調査区1

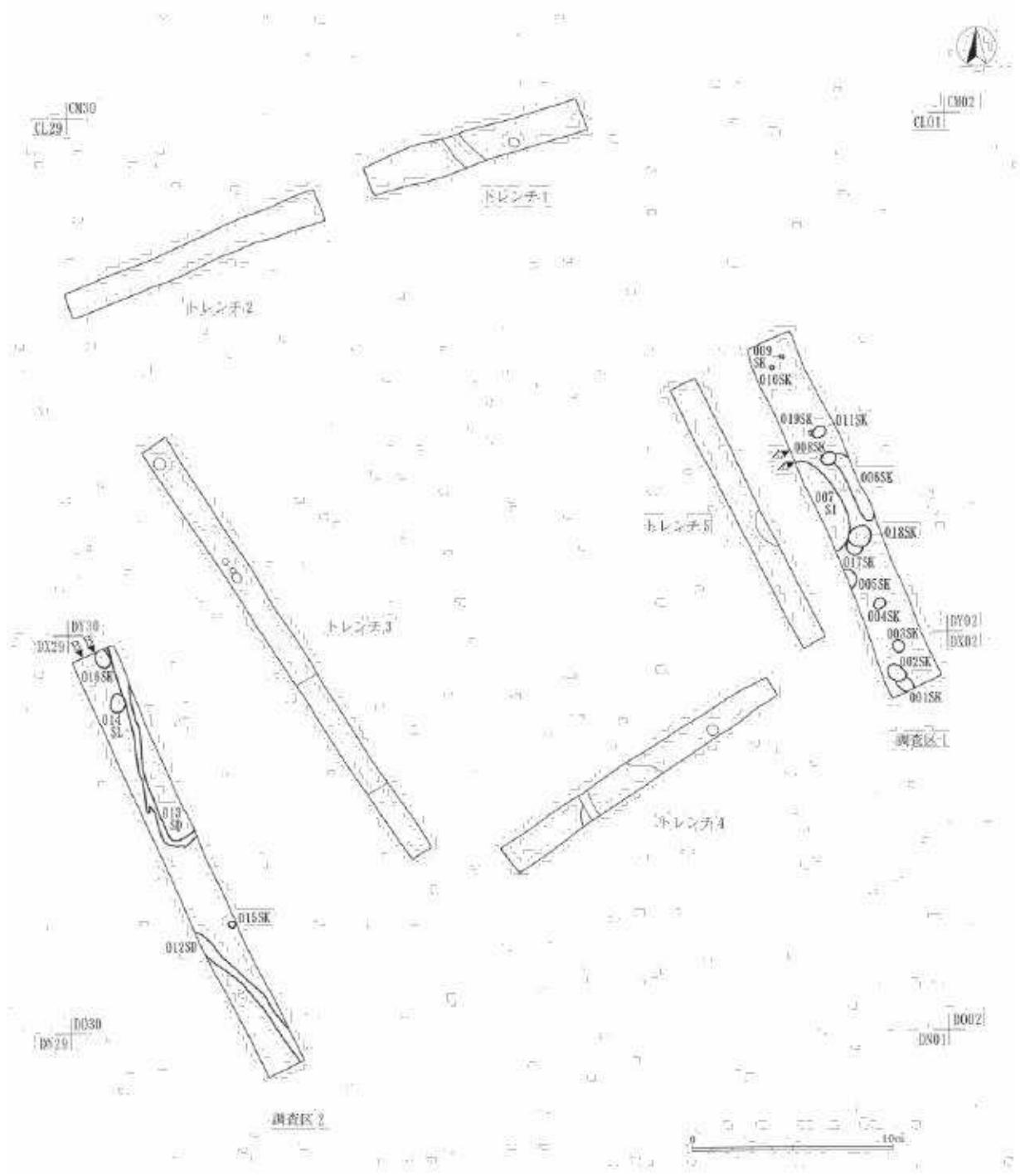
調査区1の基本層序は、西壁側のA-A'で示した箇所を選定して挿図3に示した。地表側から、I層(耕土)・遺構確認面であるローム層となる。

(2) 調査区2

調査区2の基本層序は、北壁側のB-B'で示した箇所を選定して挿図3に示した。地表側から、駐車場の砕石を含む造成土・II層(10YR 2/2 黒褐色 シルト質埴壌土 しまりなし 腐朽した樹木等を含む)・III層(10YR 4/4 褐色 売壌土 しまりあり)となる。II層が旧耕土、III層が漸移層となる。



挿図3 基本層序



挿図4 遺構全体図

第4章 遺構と遺物

第1節 調査区1

(1) 壴穴建物

① 007SI (挿図5 写真図版3)

CC48を中心にして検出し、西側が調査区外となって全体の1／5程度を調査した。嵩穴建物の大部分が調査区外のため詳しい形態は不明だが、隅丸方形もしくは円形である。大きさは4.9×(1.2)mであり、主軸方向はN25°Wを示す。壁高は0.62mを測り、緩やかな壁面をなす。床面は検出したほぼ全面でたたき状に硬く良好である。焼跡は確認されなかったが、調査区外にあるものと想定される。

出土遺物は、渦巻き状の沈線を施した深鉢の把手とみられる土器片（挿図7-1）が確認された。石器はホルンフェルスの剥片（挿図7-10）が確認された。

出土遺物より、縄文時代中期後葉に位置づけられる。

(2) 土坑・貯蔵穴

① 001SK (挿図5 写真図版3)

DW00で検出し、002SKに切られていたため、全体の3／4程度を調査した。大きさは(60)×60cmで、平面形は不定形であり、深さは20cmを測る。

出土遺物はなく、確定した時期を示すことはできない。

② 002SK (挿図5 写真図版3)

DW01で検出し、001SKを切っていた。大きさは(100)×72cmで、平面形は梢円形であり、深さは42cmを測る。

出土遺物は、無文で、器壁が薄く、器面に指頭圧痕が認められる土器片（挿図7-2）が確認された。上記の特徴より、縄文時代早期末の東海系土器とみられる。

出土遺物より、縄文時代早期末に位置づけられる。

③ 003SK (挿図5 写真図版3)

DX00で検出し、全体を調査した。大きさは62×58cm、平面形は不定形であり、深さは12cmを測る。

出土遺物はなく、確定した時期を示すことはできない。

④ 004SK (挿図5 写真図版3)

DY00で検出し、全体を調査した。大きさは36×36cm、平面形は梢円形であり、深さは14cmを測る。

出土遺物はなく、確定した時期を示すことはできない。

⑤ 005SK (挿図5 写真図版3)

CA49で検出し、西側は調査区外であったため、全体の1／2程度を調査した。大きさは106×(54)cmで、平面形は不定形であり、深さは64cmを測る。

出土遺物は、小破片のため図示できないが、土器片が確認された。

出土遺物が少なく、確定した時期を示すことはできない。

⑥ 006SK (挿図5 写真図版3)

CC49で検出し、008SKに切られていたが、ほぼ全体を調査した。大きさは372×58cm、平面形は不定形であり、深さは64cmを測る。

出土遺物は、器壁が薄く、隆帯をはり付けた土器片（挿図7-3）が確認された。上記の特徴より、縄文時代早期末の東海系土器とみられる。石器は、頁岩のスクレイバー（挿図7-8）、黒曜石の剥片（挿図7-9）が確認された。

出土遺物より、縄文時代早期末に位置づけられる。

⑦ 008SK (挿図5 写真図版3)

CD49で検出し、006SKを切っていた。大きさは(72)×64cm、平面形は不定形であり、深さは39cmを測る。

出土遺物は、黒曜石の石鏃未成品（挿図7-11）が確認された。

出土遺物が少なく、確定した時期を示すことはできない。

⑧ 009SK (挿図5 写真図版3)

CF47で検出し、全体を調査した。大きさは24×14cm、平面形は楕円形であり、深さは24cmを測る。

出土遺物はなく、確定した時期を示すことはできない。

⑨ 010SK (挿図5 写真図版3)

CF47で検出し、全体を調査した。大きさは30×26cm、平面形は円形であり、深さは15cmを測る。

出土遺物はなく、確定した時期を示すことはできない。

⑩ 011SK (挿図5 写真図版4)

CD48で検出し、全体を調査した。大きさは64×46cm、平面形は楕円形であり、深さは21cmを測る。

出土遺物はなく、確定した時期を示すことはできない。

⑪ 017SK (挿図6 写真図版4)

CB49で検出し、018SKに切られていたため、全体の1/4程度を調査した。大きさは(38)×76cm、平面形は不定形であり、深さは32cmを測る。

出土遺物はなく、確定した時期を示すことはできない。

⑫ 018SK (挿図6 写真図版4)

CB49で検出し、017SKを切っていた。大きさは(122)×100cm、平面形は不定形であり、深さは49cmを測る。

出土遺物は、硬砂岩の打製石斧（挿図7-6）が確認された。

出土遺物が少なく、確定した時期を示すことはできない。

⑬ 019SK (挿図6 写真図版4)

CD48で検出し、全体を調査した。大きさは20×14cm、平面形は楕円形であり、深さは28cmを測る。

出土遺物はなく、確定した時期を示すことはできない。

(3) 遺構外

- ① 遺構外より、表裏両面に打痕がみられる砂岩の磨石（挿図7-7）が確認された。

第2節 調査区2

(1) 溝

- ① 012SD（挿図6 写真図版4）

D P34を中心に検出したが、大部分は調査区外と考えられる。溝の調査延長は8.3mで、調査範囲での幅0.28~0.53m、深さ0.07~0.3mを測り、長軸方向はN41°Wを示す。断面形は逆台形である。

出土遺物はなく、確定した時期を示すことはできない。

- ② 013SD（挿図6 写真図版4）

D V31を中心に検出したが、大部分は調査区外と考えられる。溝の調査延長は11.4mで、調査範囲での幅0.14~0.50m、深さ0.02~0.12mを測り、長軸方向はN15°Wを示す。断面形は逆台形である。

出土遺物は、黒曜石の剥片、硬砂岩の打製石斧（挿図7-5）が確認された。

出土遺物が少なく、確定した時期を示すことはできない。

(2) 土坑・貯蔵穴

- ① 015SK（挿図5 写真図版4）

D Q33で検出し、全体を調査した。大きさは29×20cm、平面形は楕円形であり、深さは14cmを測る。

出土遺物はなく、確定した時期を示すことはできない。

- ② 016SK（挿図6 写真図版4）

D X30で検出し、全体を調査した。大きさは100×72cm、平面形は楕円形であり、深さは32cmを測る。

出土遺物はなく、確定した時期を示すことはできない。

(3) 炉・カマド

- ① 014SL（挿図6 写真図版4）

D W31で検出し、013SDに切られていたが、ほぼ全体を調査した。大きさは90×(66)cm、平面形は楕円形であり、深さは14cmを測る。主軸方向はN6°Eを示す。覆土全体に炭と礫が確認され、底面には、28×28cmを測る平盤の石が置かれていた。石は中央で2つに割れていた。遺構の状況から集石炉と判断された。

出土遺物はなく、確定した時期を示すことはできない。

第3節 予備調査（試掘調査）

（1）トレント1

大きさ1.5×11mのトレントを東西方向に設定した。東から西に緩やかに傾斜している。

遺構は、径50cmの土坑と幅90cmの溝が確認された。溝からビニール片が確認されたため、新しい遺構である。遺物は、チャートの剥片が確認された。

（2）トレント2

大きさ1.5×13.5mのトレントを東西方向に設定した。東から西に比較的急な傾斜となっている。

遺構及び遺物は確認されなかった。

（3）トレント3

大きさ1.4×24.5mのトレントを北西から南東方向に設定した。

遺構は、トレント中央から南東寄りに暗褐色土の落込みが6.5mの範囲で確認された。埋土中から縄文土器が確認された。また、北寄りでは径50～30cm程度の土坑が4個確認された。

遺物は、器壁が薄く、隆帶をはり付けた土器片（挿図7-4）が確認された。上記の特徴より、縄文時代早期末の東海系土器とみられる。石器は、チャートの剥片が確認された。

（4）トレント4

大きさ1.5×15.5mのトレントを北東から南西方向に設定した。

遺構は、ほぼ中央に径4.7mの円形とみられる遺構が確認された。また、土坑が1個確認された。遺物は、小破片のため時期不明の土器が確認された。

（5）トレント5

大きさ1.3×14.5mのトレントを南北方向に設定した。わずかであるが北方向に傾斜している。

遺構は、トレントの中央付近で、径2m程度の半円形の暗褐色土の遺構が確認できた。東側に続くものと見られる。遺物は、小破片のため時期不明の土器が確認された。

第5章 まとめ

第1節 これまでの調査

下り松遺跡では、平成13年度、平成15年度の2年度に分けて、国道474号（飯喬道路）の建設工事に伴う発掘調査が長野県埋蔵文化財センターによって行われている。縄文時代中期中葉から後葉の竪穴建物跡5軒、建物跡1棟等が確認されている。また、明確な遺構は確認されなかったが、縄文時代早期末葉から前期初頭の東海系土器等が確認されている。

第2節 縄文時代

今回の調査では、竪穴建物跡とみられる遺構が確認された。この遺構からは、縄文中期後葉の下伊那タイプ土器とみられる渦巻き状の沈線を施した土器片が確認された。また、土坑等からは縄文時代早期末の東海系土器とみられる資料が確認された。この資料はいずれも断片的なものであり、全体の様相は不明である。

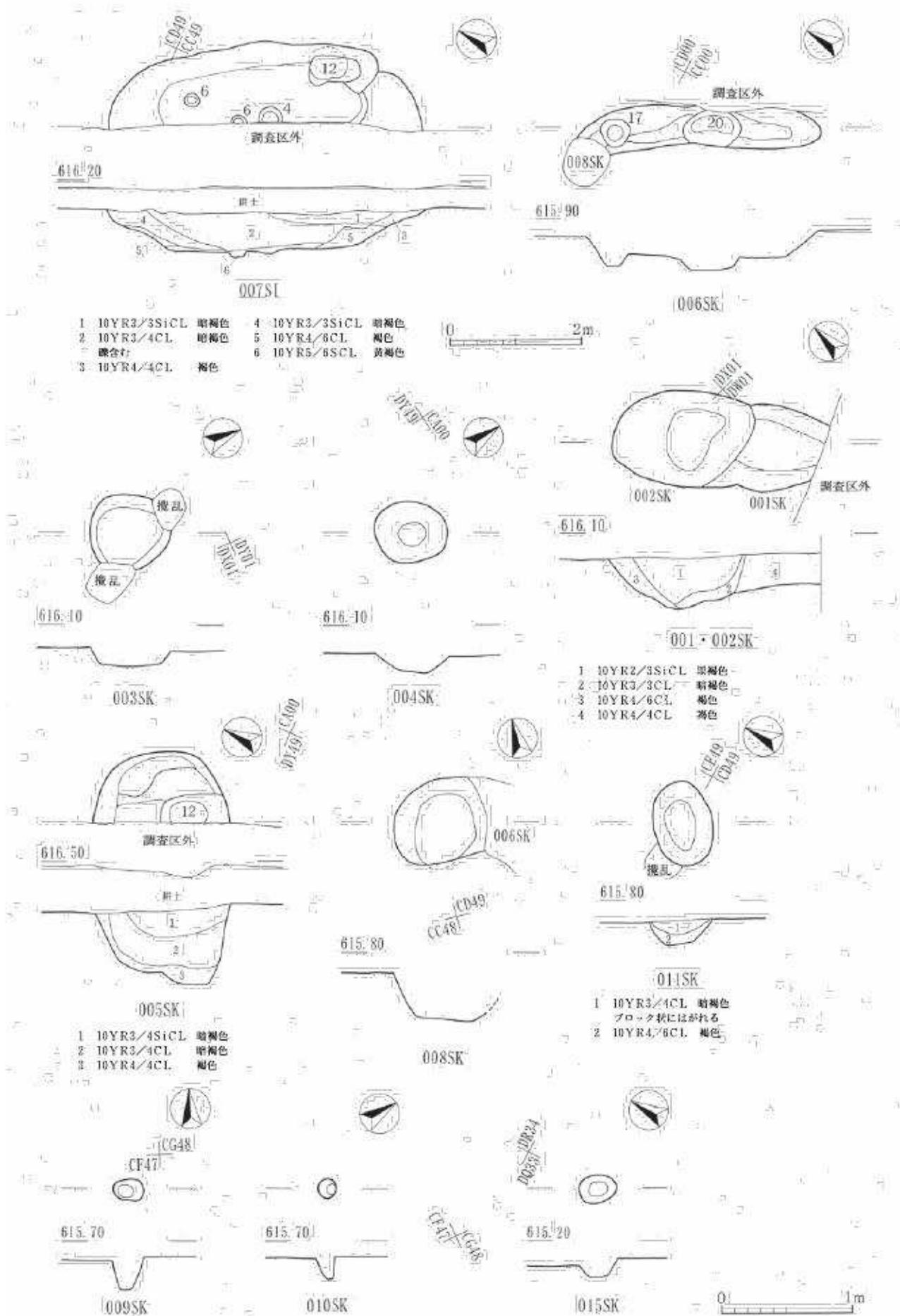
今回の調査は、先行して行われた長野県埋蔵文化財センターの調査結果と概ね一致する。下り松遺跡では、縄文時代中期中葉から後葉を中心とする時期に小規模な集落が営まれていたと考えられる。また、縄文時代早期の土坑や土器片が確認されており、集落縁辺部的な様相を示すとも考えられる。調査地周辺には縄文時代早期にさかのぼる集落が営まれていた可能性も考えられる。

今次調査で得られた成果について簡単に記した。遺構・遺物が少ないため不明なことが多いが、山本地区における縄文時代早期・中期の様相の一端をつかむことができた。

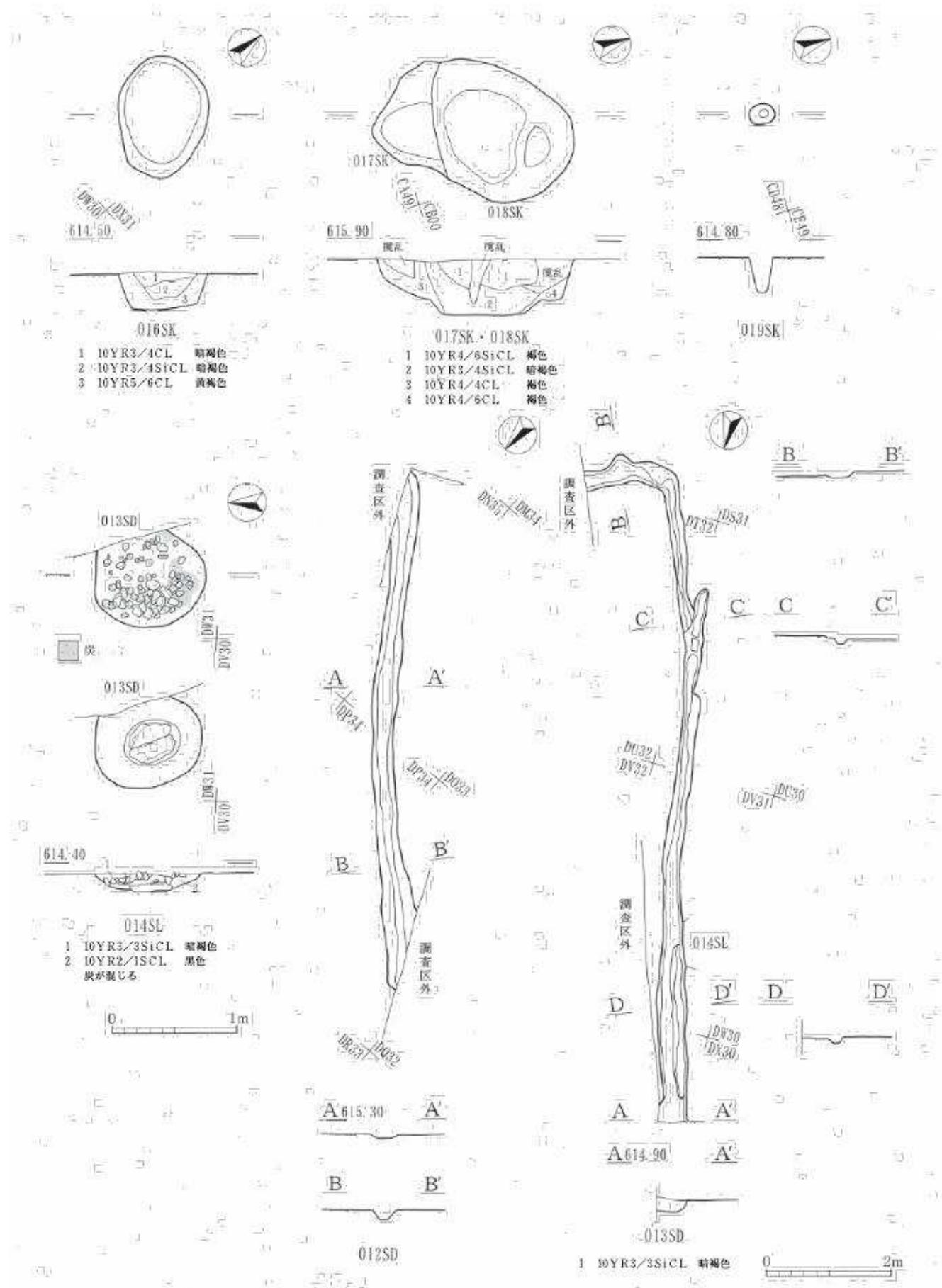
最後になりましたが、調査や整理作業の実施にあたって多大なるご理解・ご協力をいただきました皆様方には深く感謝申し上げます。

引用・参考文献

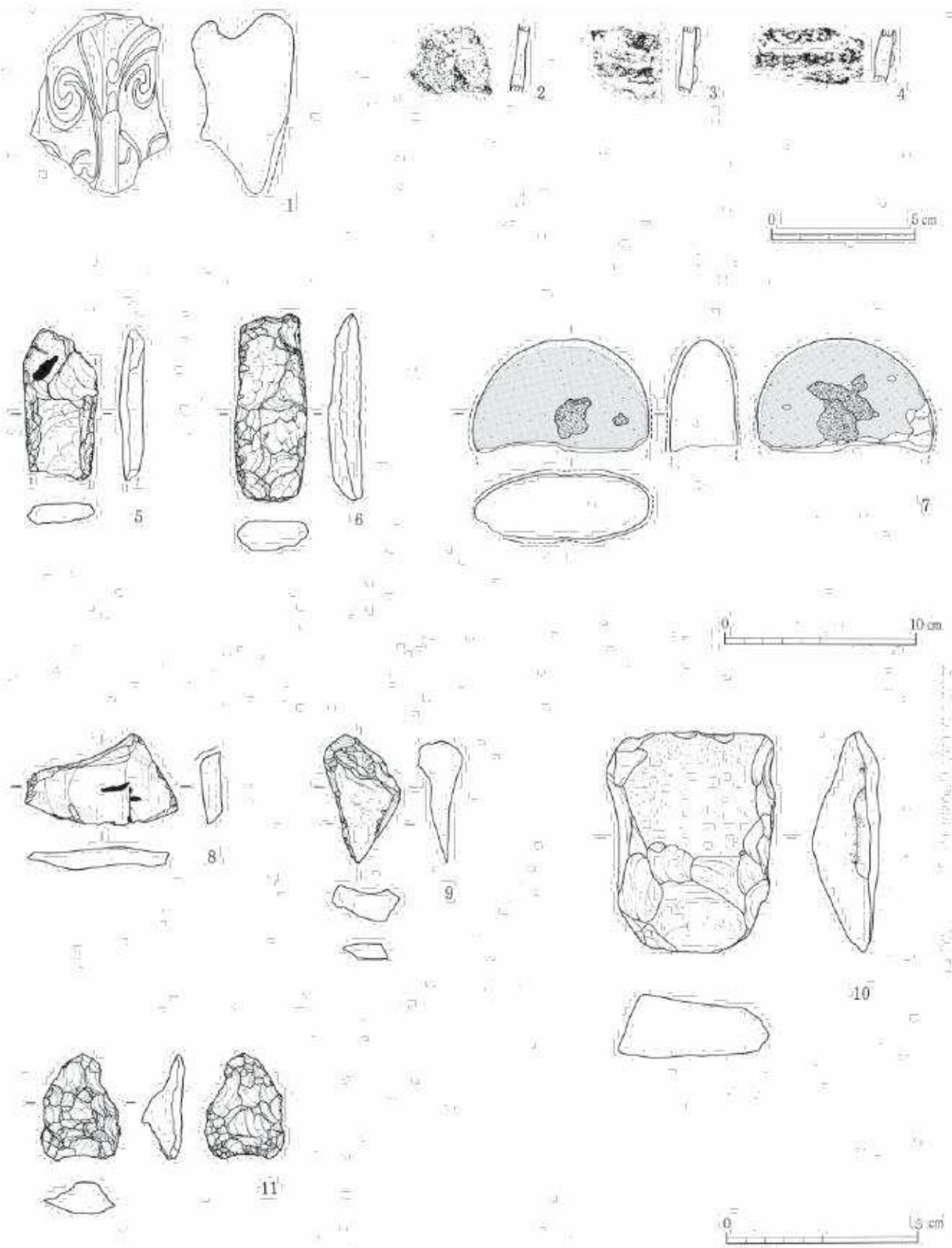
- 飯田市教育委員会 2006 『沖平南遺跡』
- 飯田市教育委員会 2009 『切石遺跡群』
- 飯田市教育委員会 2017 『飯田城下町遺跡』
- 国土交通省中部地方整備局・長野県埋蔵文化財センター 2009
『国道474号（飯喬道路）埋蔵文化財発掘調査報告書3 一飯田市内その3-』



挿図5 007SI・001SK~006SK・008SK~011SK・015SK



挿図6 016SK~019SK・012SD・013SD・014SL



挿図7 出土遺物

(1・10 007SI、2 002SK、3・8・9 006SK、4 トレンチ3、5 013SD、6 018SK、7 遺構外、11 008SK)



調査区 1 調査前全景



調査区 2 調査前全景

写真図版 2



調査区 1 全景



調査区 2 全景



007SI



001SK・002SK



003SK



004SK



005SK



006SK



008SK



009SK・010SK

写真図版 4



011SK・019SK



015SK



016SK



017SK・018SK



012SD



013SD



014SL



014SL断面

報告書抄録

ふりがな	さがりまついせき					
書名	下り松遺跡					
副書名						
編著者名	木下 正史					
編集機関	長野県飯田市教育委員会					
所在地	〒395-8501 長野県飯田市大久保町2534番地					
発行年月日	平成30年3月					
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	市町村番号 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 調査原因
さがりまついせき 下り松遺跡	いいだしたけさ 飯田市竹佐433-1他	20205 342	35° 27' 48"	137° 46' 14"	2017/02/04 ～ 2017/02/18	98.93m ² 工場建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項	
下り松遺跡	集落跡	縄文時代	竪穴建物・集石炉 ・溝・土坑	縄文土器・石器		
要約	・縄文時代早期末の土坑や縄文時代中期後葉の竪穴建物1軒を調査し、当該期の集落等を考える上での資料が得られた。					

さが まつ い せき
下り松遺跡

平成30年3月 発行

編集・発行 長野県飯田市大久保町2534

飯田市教育委員会

印 刷 杉 本 印 刷 株 式 会 社
